

小学校英語実施における課題と展望

「小学校英語に関する基本調査」

教員調査と保護者調査の結果から

吉田研作 (上智大学外国語学部)

直山木綿子 (京都市教育委員会)

沓澤 糸 (ベネッセ教育研究開発センター)

福本優美子 (ベネッセ教育研究開発センター)

y-fukumoto@mail.benesse.co.jp

本発表の概要

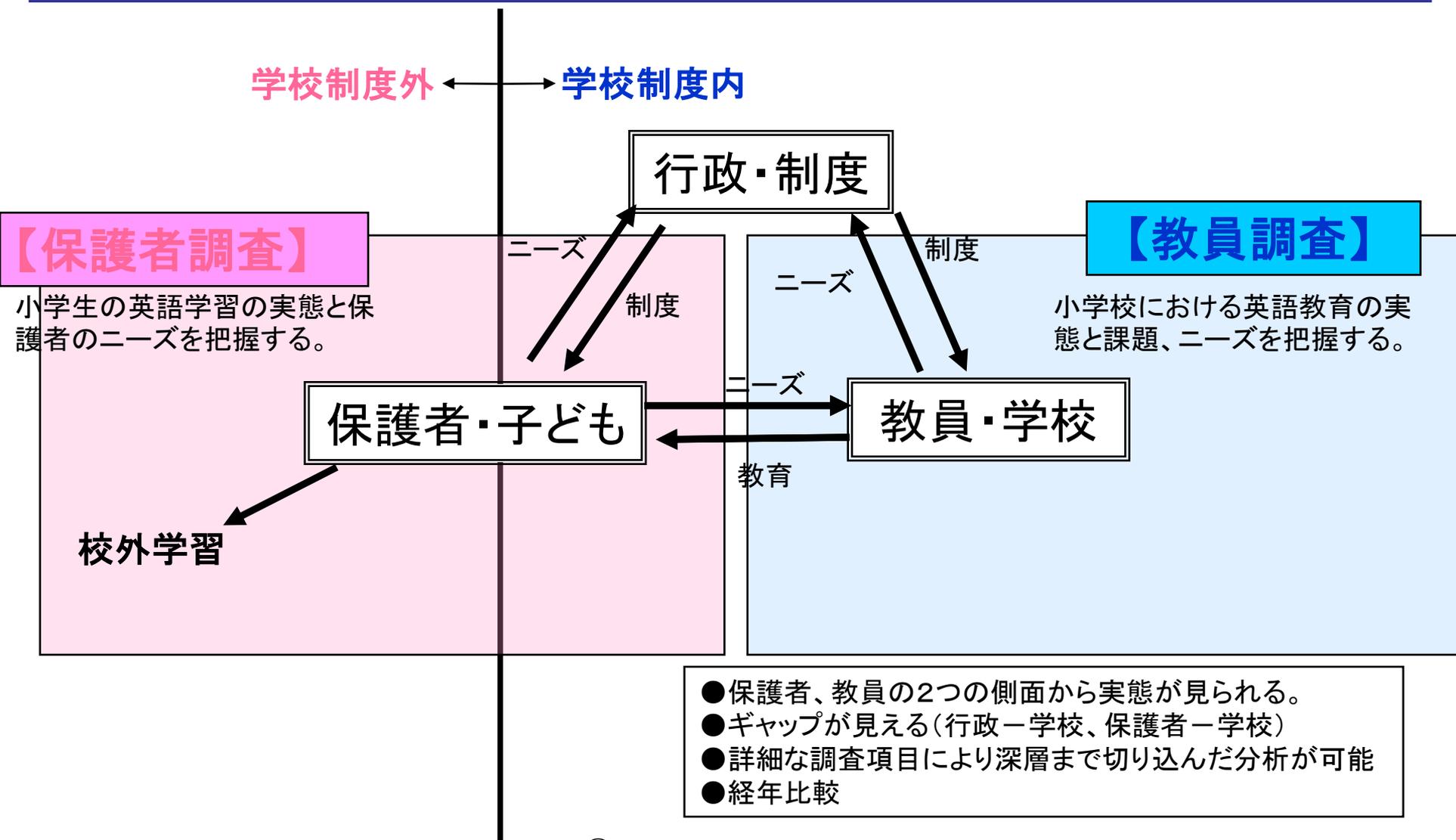
- 本調査の位置づけについて
- 調査結果の分析から
- 今後の小学校英語に向けて

京都市教育委員会 直山木綿子先生

本調査の位置づけ

- 小学校英語の必修化を目前にした現状の把握
(短期的位置づけ)
- 英語教育に関する制度や社会動向の変化に伴う、教員や保護者の意識・行動の変化を経年分析
(中長期的位置づけ)

調査の全体像



研究メンバー

- ・吉田 研作先生
（上智大学外国語学部長／中教審外国語専門部会委員）
- ・直山木綿子先生
（京都市教育委員会学校指導課指導主事）
- ・金子真理子先生
（東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター准教授）
- ・矢野 智子先生
（京都市立鳳徳小学校）

* 所属・肩書きは、2007年8月現在のものです。

- ・ベネッセ教育研究開発センター
木村治生（教育調査室長）
沓澤糸（主任研究員）
福本優美子（研究員）
朝永昌孝（研究員）

教員調査の概要

- 調査目的

公立小学校における現在の英語活動の実態把握
小学校英語についての教員の意識把握

- 調査方法

郵送法による質問紙調査

- 調査時期

2006年7月～8月

- 調査対象

全国の公立小学校の教員(教務主任)

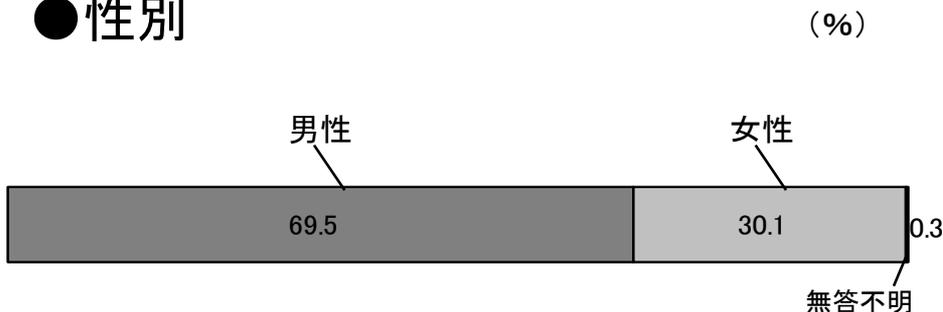
3,503名(配布数 10,000通、回収率35.0%)

* 抽出方法・・・全国の公立小学校のリストより、無作為に10,000校を抽出し、教務主任に回答を依頼。

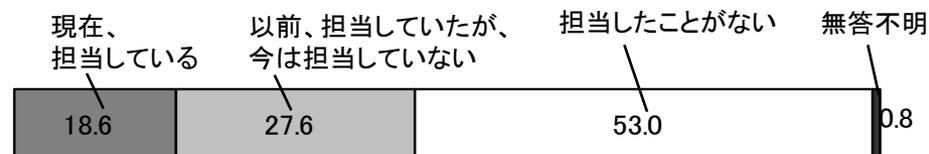
回答者の特性 (教員調査)

* n=3,503

●性別



●英語教育の担当の有無



●年齢

35歳未満	1.9%	50～55歳未満	26.5%
35～40歳未満	4.7%	55～60歳未満	5.1%
40～45歳未満	19.2%	60歳以上	0.0%
45～50歳未満	42.1%	無答不明	0.5%

●担任している学年

1年生	3.6%	それ以外	3.6%
2年生	3.5%	担任はしていない	66.8%
3年生	3.4%	無答不明	6.1%
4年生	2.9%		
5年生	4.0%		
6年生	5.9%		

●学校の種類

英語教育に関する研究開発学校(研究開発指定校を含む)	2.3%
英語教育に関する特区にある学校	5.7%
それ以外	90.0%
無答不明	1.9%

●学校の所在地

北海道	4.2%(147校)	中国	10.1%(355校)
東北	14.3%(500校)	四国	5.3%(185校)
関東	21.4%(749校)	九州	13.7%(480校)
中部	21.2%(744校)	無答不明	0.6%(21校)
近畿	9.2%(322校)		

保護者調査の概要

- ・ **調査目的**

 - 小学生の英語学習の実態把握

 - 小学校英語についての保護者の意識把握

- ・ **調査時期**

 - 2006年9月～10月

- ・ **調査対象**

 - 小1生～小6生の子どもをもつ保護者4,718名

 - (配布数5,847通、回収率80.7%)

 - ※大都市（東京23区）、中都市（地方中規模都市）、郡部（町村部）の3地域区分を設定してサンプル抽出。学校通しで調査実施。

A. 英語活動の実態

公立小学校における
現在の英語活動の実態について

実施状況

●英語教育の実施の有無

- ・行っている 94.0% 行っていない5.3% 無答不明0.7%

* 参考:文部科学省「平成17年度小学校英語活動実施状況調査」:「実施」95.8%

●学年別実施率

- ・学年別の実施率→低学年 8割以上
中・高学年 9割以上

●教育課程上の位置づけ

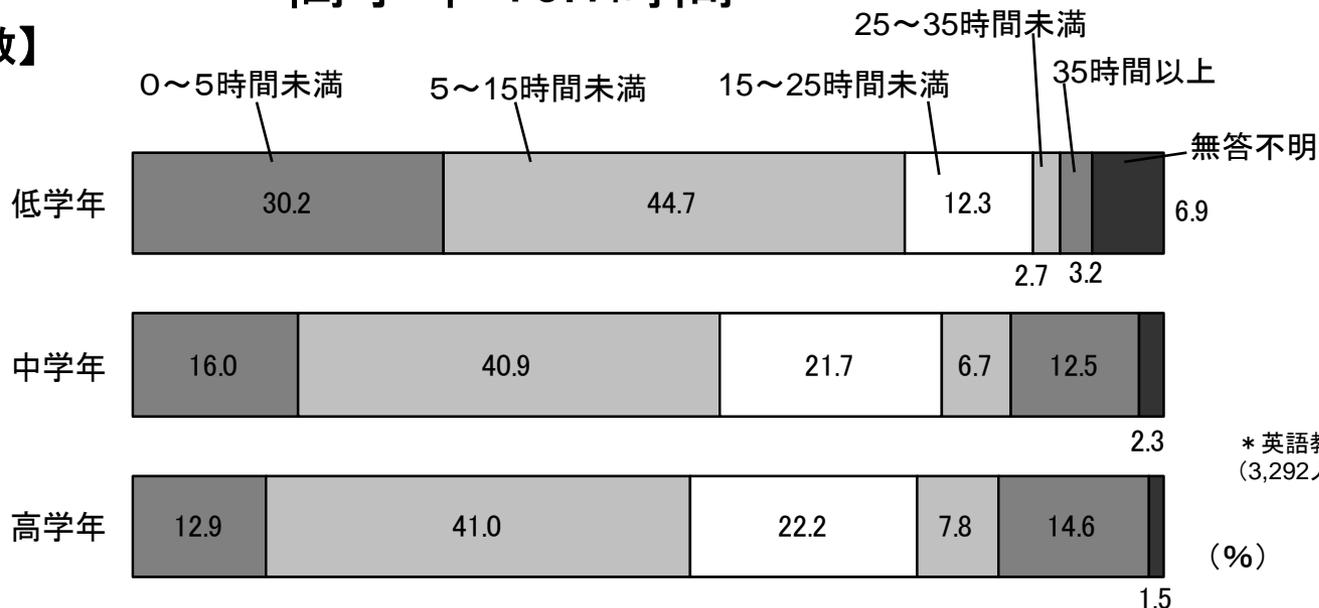
- ・低学年→「教科もしくはそれに準じるもの」(約4割)、
「その他(教科課程外の時間)」(約2割)
- ・中・高学年→約9割が「総合的な学習の時間」で実施。

実施状況

●年間時数

- ・年間時数は15時間未満が過半数を占める。
- ・「35時間以上」実施しているのは、高学年でも14.6%のみ。
- ・平均年間時数→低学年 9.3時間
 中学年 15.0時間
 高学年 16.1時間

【年間時数】



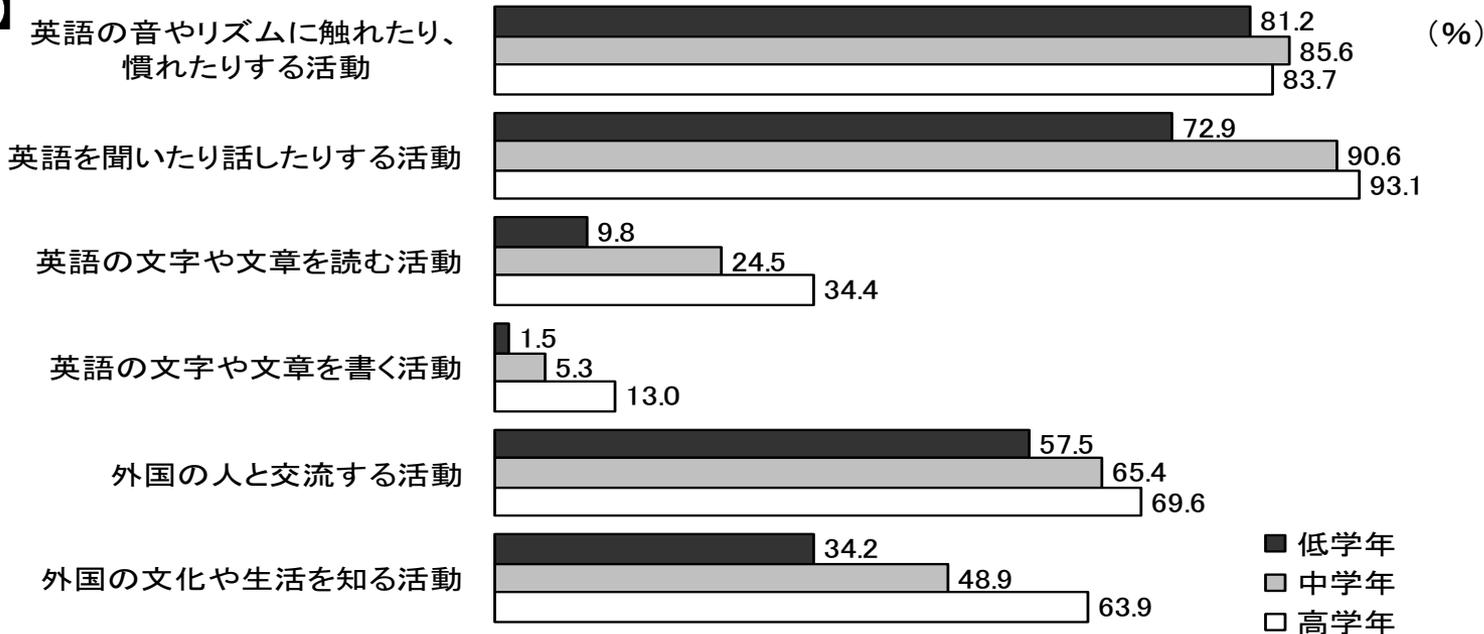
* 英語教育を「行っている」学校 (3,292人)のみ対象。

実施状況

●英語教育の内容

- ・「英語の音やリズムに触れたり、慣れたりする活動」「英語を聞いたり話したりする活動」が中心。
- ・中・高学年では「英語の文字や文章を読む活動」も3割前後実施。

【英語教育の内容】



* 低学年・中学年・高学年それぞれについて、行っている内容をすべて選択。

* 英語教育を「行っている」学校(3,292人)のみ対象

英語教育の指導者

●英語教育に関わっている人

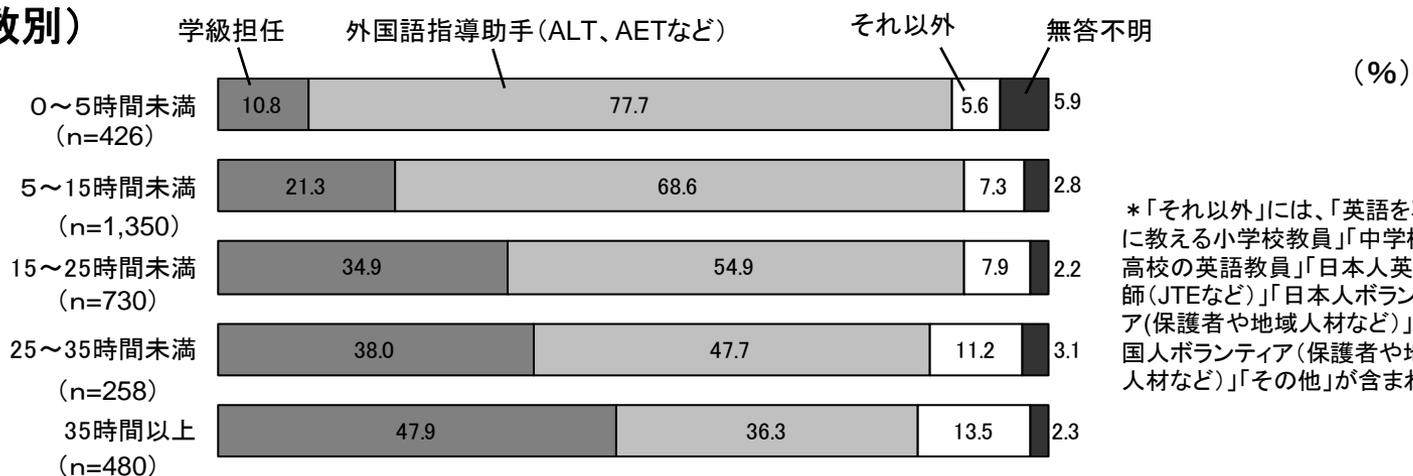
- ・英語教育を行っているのは、「外国語指導助手(ALT、AETなど)」92.3%と「学級担任」86.8%。

●中心となる指導者

- ・中心となる指導者→「外国語指導助手(ALT、AETなど)」60.1%
「学級担任」28.2%

【中心となる指導者】

(高学年の年間時数別)



*「それ以外」には、「英語を専門に教える小学校教員」「中学校や高校の英語教員」「日本人英語教師(JTEなど)」「日本人ボランティア(保護者や地域人材など)」「外国人ボランティア(保護者や地域人材など)」「その他」が含まれる。

英語教育の指導者

●外国語指導助手(ALT、AETなど)の来校頻度

- ・「月1回程度」22.1%、「月2、3回程度」20.8%
- ・「2、3か月に1回程度」17.9%
- ・年間時数が多い方が、ALTの来校頻度も多い傾向。

●教員の変化(自由記述から)

- ・英語教育を行うことで教員に良い変化があった→34.3%。
 1. 英語活動への積極性の高まり
 2. ALTとの交流の増加
 3. 英語に対する抵抗感の減少
 4. 英語教育への認識の高まり
 5. 新たな指導方法や児童の一面の発見

英語教育に関する研修

●校内研修の頻度

- ・「実施していない」学校→過半数(54.9%)を占める。
- ・実施している学校→「年に1回程度」(21.6%)がもっとも多い
- ・ALTが中心となって指導している学校
→6割以上が校内研修を実施していない

●校外研修への参加頻度

- ・「ほとんど全員が参加していない」→62.0%
- ・年間時数が35時間以上の場合
→「ほとんど全員が参加していない」 33.5%
「ほとんど全員が参加している」 20.4%

英語教育に関する研修

●研修の実施主体

- ・「市区町村」52.8%
- ・「都道府県」30.5%
- ・「他校の研究会」17.1%
- ・「民間企業」「文部科学省」「大学」はそれぞれ3%前後ほど

* 韓国の研修

韓国では、1997年に小学校3年生から英語が必修化されたことにより、教員に対して、120時間の研修が実施されている(各小学校の英語教育を総括する教員には、さらに追加で120時間)。研修は、教員の英語によるコミュニケーション力の向上と、児童の発達に合わせた学習法の習得に重点が置かれているようである。

出展: 文部科学省「韓国における小学校英語教育の現状と課題」

指導計画と教材

●指導計画

- ・指導計画を作成するときに参考にしているもの
 - 「自治体で作成している指導案や資料」23.2%
 - 「小学校英語活動実践の手引き」18.2%
 - 「市販の指導案や書籍」15.6%
 - 「大学や研究機関が作成している指導案や資料」3.3%
 - 「とくに参考にしているものはない」21.8%、「その他」12.0%
- ・35時間以上→「自治体で作成している指導案や資料」39.0%

●主に使用している英語教材

- ・「ALTなどの外部人材・機関が制作した教材」53.0%
- 「市販の教材」14.3%
- ・「担任が独自に制作した教材」「英語指導担当教員が独自に制作した教材」「自治体が制作した教材」「校内の研究会で独自に制作した教材」はそれぞれ1割にも満たない。

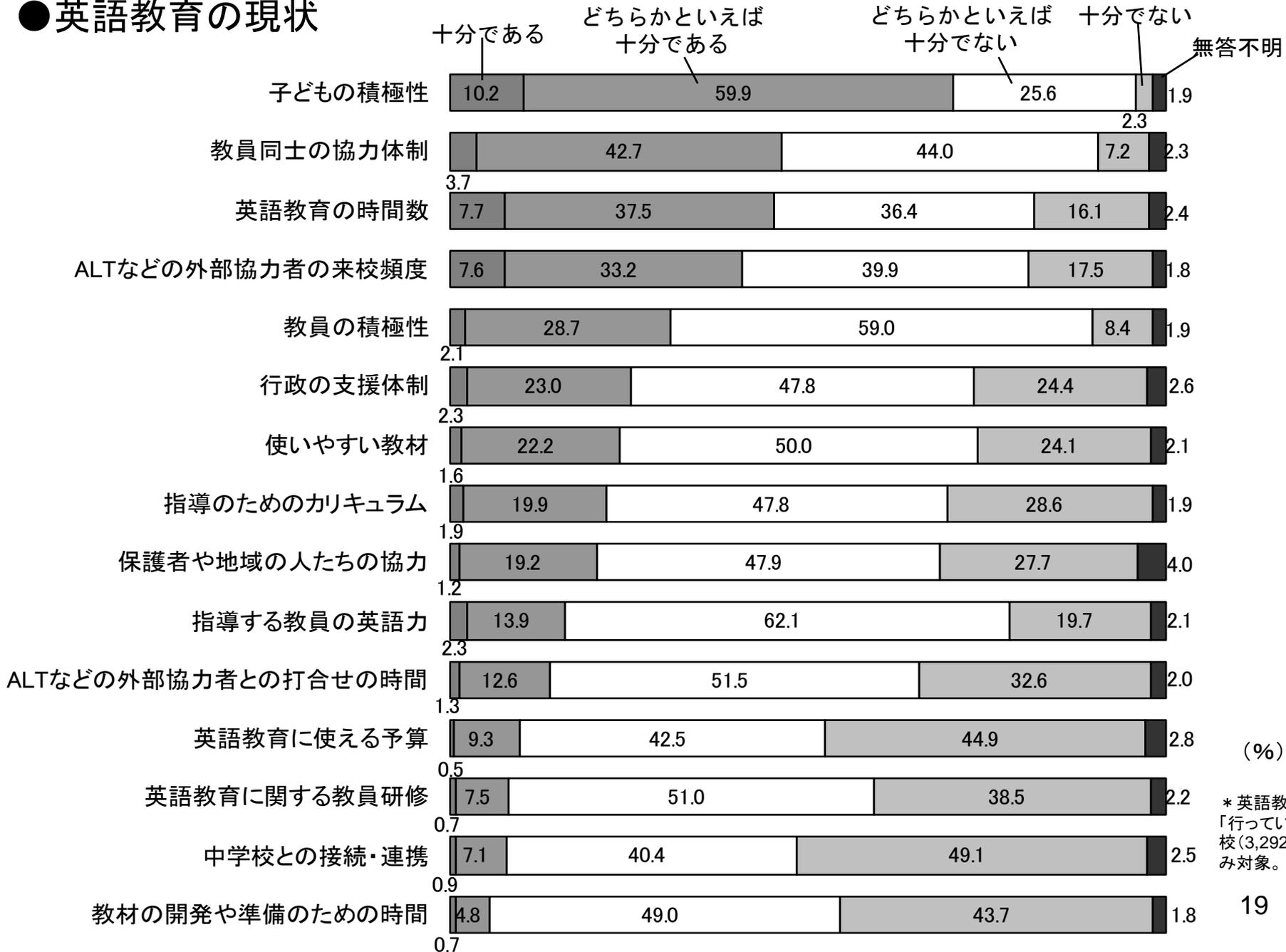
●英語教育の現状

- ・十分なものは「子どもの積極性」のみ
- ・全15項目のうち14項目は不十分という回答の方が多い
- ・もっとも不十分なのは、「教材の開発や準備のための時間」5.5%
- ・「中学校との接続・連携」「英語教育に関する教員研修」「英語教育に使える予算」なども、十分という回答は1割に満たない。

* 十分→「十分である」+「どちらかといえば十分である」

不十分→「どちらかといえば十分でない」+「十分でない」

●英語教育の現状



(%)

* 英語教育を「行っている」学校(3,292人)のみ対象。

● 英語教育の現状（高学年の年間時数別）

（%）

	0～15時間 未満		15～25時間 未満		25時間以上
子どもの積極性	65.3	≪	75.9		76.7
教員同士の協力体制	40.4	<	47.2	≪	61.5
英語教育の時間数	25.6	≪	57.7	≪	81.3
ALTなどの外部協力者の来校頻度	28.8	≪	48.9	≪	62.2
教員の積極性	23.9	<	32.2	≪	46.6
行政の支援体制	17.9	<	27.3	≪	42.5
使いやすい教材	15.3	≪	25.7	≪	43.3
指導のためのカリキュラム	11.5	≪	26.0	≪	43.2
保護者や地域の人たちの協力	17.0		20.6	<	28.5
指導する教員の英語力	12.1		16.9	<	26.0
ALTなどの外部協力者との打合せ時間	12.1		14.7		17.9
英語教育に使える予算	5.0	<	11.3	<	20.5
英語教育に関する教員研修	4.5		7.1	≪	19.0
中学校との接続・連携	6.3		7.4	<	13.0
教材の開発や準備のための時間	4.1		4.9		9.7

* <>は5ポイント以上の差があったもの。≪≫は10ポイント以上の差があったもの。

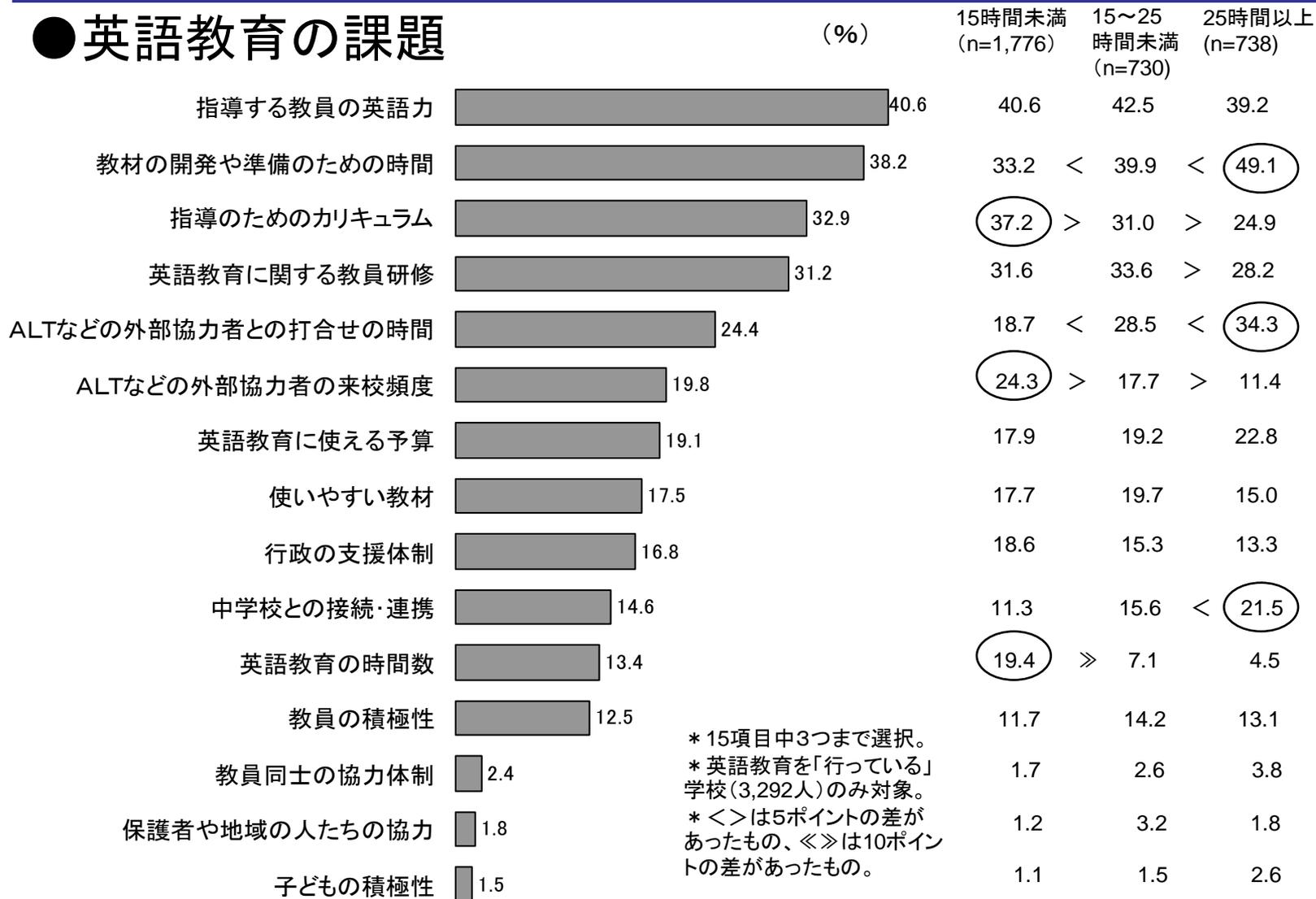
* 「十分である」+「どちらかといえば十分である」の%。

* 「0～15時間未満」:n=1,776、「15時間～25時間未満」:n=730、

「25時間以上」:n=738

英語教育の現状と課題

● 英語教育の課題



* 15項目中3つまで選択。
 * 英語教育を「行っている」
 学校(3,292人)のみ対象。
 * <>は5ポイントの差が
 あったもの、≪≫は10ポイン
 トの差があったもの。

英語教育の現状と課題

● 英語教育に対する評価との関連

- ・「英語教育の時間数」で大きな差。

【英語教育の現状】(英語教育に対する評価別) (%)

	うまく いっている (n=1,704)	うまくいっ ていない (n=1,504)	差
英語教育の時間数	63.3	25.0	38.3
ALTなどの外部協力者の来校頻度	57.9	22.3	35.6
教員の積極性	47.8	12.3	35.5
教員同士の協力体制	62.9	28.7	34.2
行政の支援体制	38.5	10.6	27.9
使いやすい教材	36.8	9.6	27.2
指導のためのカリキュラム	34.3	8.0	26.3
子どもの積極性	81.2	58.6	22.6
指導する教員の英語力	24.5	6.8	17.7
保護者や地域の人たちの協力	27.6	12.4	15.2
ALTなどの外部協力者との打合せの時間	21.1	6.2	14.9
英語教育に関する教員研修	13.6	2.3	11.3
英語教育に使える予算	15.2	4.0	11.2
中学校との接続・連携	11.8	3.8	8.0
教材の開発や準備のための時間	8.9	1.7	7.2

*「十分である」+「どちらかといえば十分である」の%。
 *「うまくいっている」は「総合的にみて、貴校の英語教育はうまくいっていると思いますか」の設問で、「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と回答した場合。「うまくいっていない」は、「あまりうまくいっていない」「まったくうまくいっていない」と回答した場合。

B.教員の意識

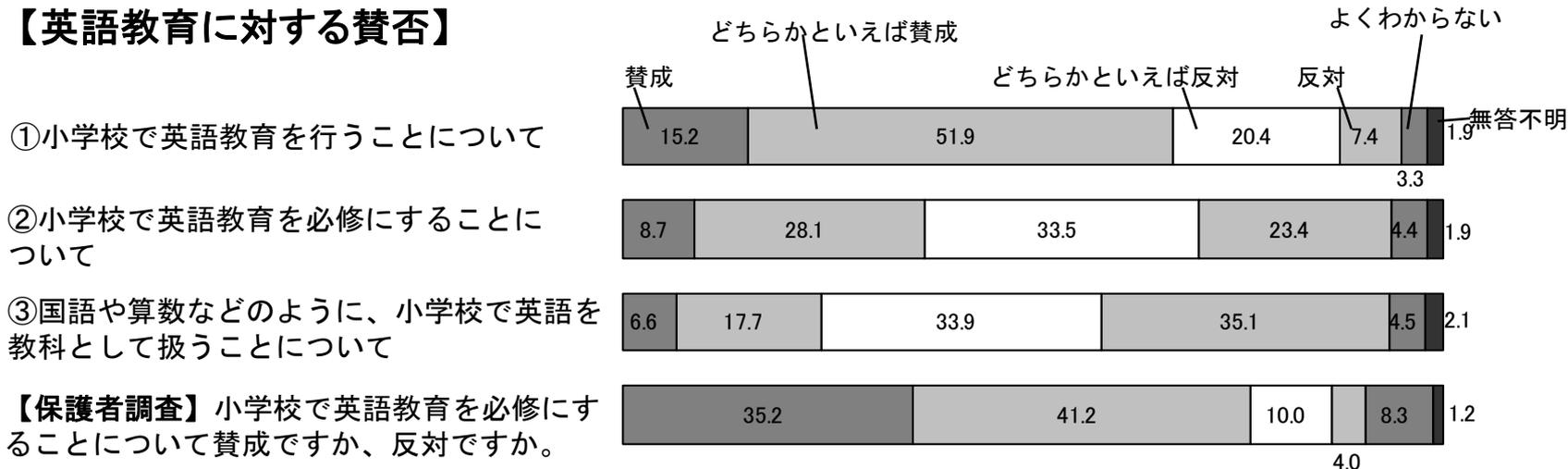
小学校英語についての教員の意識 保護者の意識との比較も

英語教育に対する賛否

●英語教育に対する賛否

- ①英語教育を行うこと→「賛成」67.1%
- ②必修化→「賛成」36.8%
- ③教科化→「賛成」24.3%
- ・保護者は76.4%が必修化に「賛成」
「賛成」→「賛成」+「どちらかといえば賛成」

【英語教育に対する賛否】



重要なことと望むこと

● 英語教育で重要なことと望むこと

(%)

	【教員】 英語教育で重要なこと (n=3,503)	【保護者】 小学校英語に望むこと (n=4,718)
英語に対する抵抗感をなくすこと	94.8	92.2
英語の音やリズムに触れたり、 慣れたりすること	93.8	92.1
外国の人と交流すること	93.7	85.0
外国の文化や生活を知ること	89.7	82.3
英語を聞いたり話したりすること	88.1	86.2
英語の文字や文章を読むこと	32.7	67.5
英語の文字や文章を書くこと	17.5	61.3

*「重要なこと」:「とても重要」+「まあ重要」の%
「望むこと」:「とても望む」+「まあ望む」の%

小学校英語がもたらすもの

● 児童の変化（自由記述から）

・英語教育を行うことによって、児童によい変化があった→66.5%

1. 英語活動への積極的な取り組み

活動を通して、英語に対する抵抗感が薄れる。

「通じた！」という喜びの経験が得られる。

児童の新たな面を引き出し、自信を持たせるきっかけとなる。

2. 外国人に対する抵抗感の減少

外国人（ALTなど）に対して、物怖じしなくなった

3. コミュニケーション能力の向上、他文化への興味の高まり

（英語に限らず）コミュニケーション能力や積極性の向上が見られる。

人前で発表できる児童が増えた。表現力が豊かになった。

クラスメイトを多面的・肯定的に捉える態度の育成

他文化への関心が増した

4. 英語使用への素地の発達

さらに英語に親しみ、覚えて使おうとする姿勢が見られる。

小学校英語がもたらすもの

さらに・・・

- ・発音が良くなった
- ・語彙が増えた
- ・中学校へ行ってから、英語の授業に積極的に取り組む子が多いと聞いた。
- ・中学校の英語への移行がスムーズ
- ・イングリッシュサマーキャンプなどに参加する子どもが増えた。
- ・外部の試験に積極的に参加するようになった。
- ・(児童が)明るくなった。

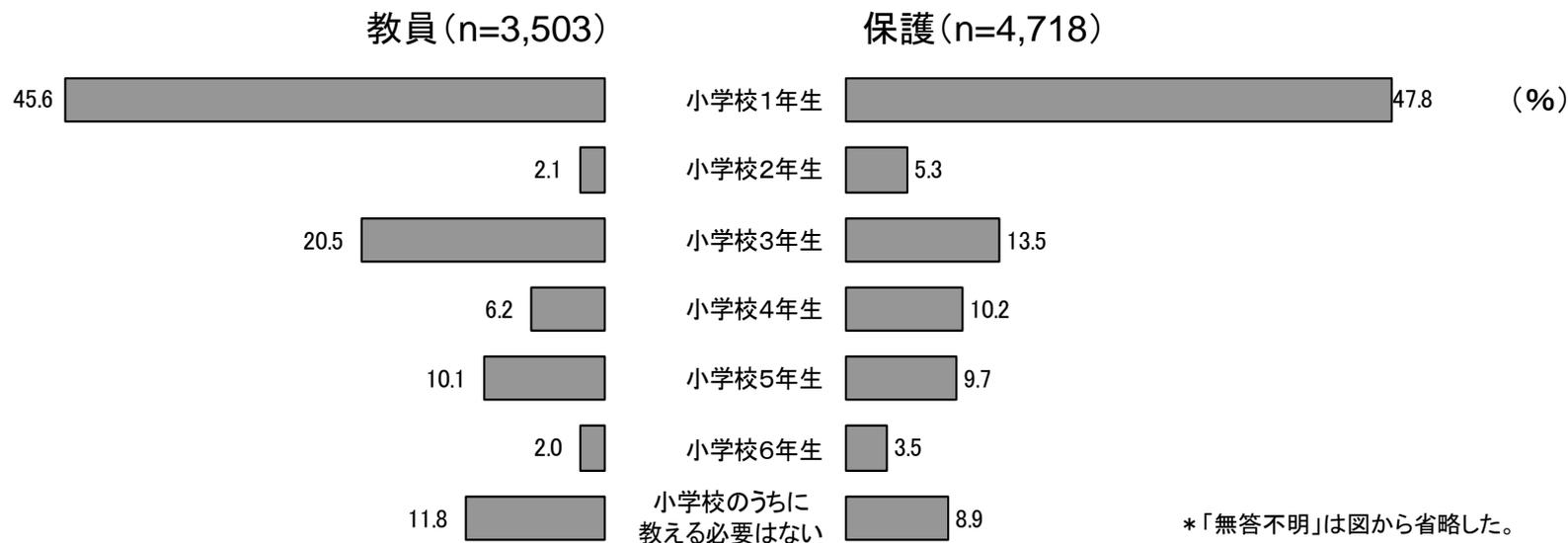
望ましい開始学年

●望ましい開始学年

- ・「小学校1年生」が45.6%と最も多い。
- ・英語教育の担当経験がある教員の方が、「担当したことがない」教員よりも「1年生」と回答する比率が10ポイントほど高い

* 担当経験がある教員:「現在、担当している」「以前、担当していたが、今は担当していない」

【望ましい開始学年】



*「無答不明」は図から省略した。